

鷺

舞

.....
さぎが橋を渡いた

さぎが橋を渡いた

しぐれの雨に

ぬれとーり とーり

.....

雌雄ひよつがい一番の鷺が、唄や囃子のゆるやかな旋律に乗って立ち舞う姿が、十日も過ぎた今、目を閉じると、まぶたの裏に生き生きと蘇ってくる。

島根県鹿足郡津和野町の弥栄神社やさかに伝わる鷺舞は、天文年間に、時の津和野城主吉見正頼によって、山口の祇園会ぎおんえから移入されたものであるが、もともと京都八坂神社の祇園会に伝承された神事で、京都から山口へ、山口から津和野へと、再度の転入を経たものという。坂崎出羽守の時

一旦中絶したが、亀井氏は津和野入城とともに諸式の復興につとめ、第二代の^{これが}妓政の時代に、わざわざ京都に人を派して祇園会の鷺舞を習得させ、正保初年復活させて今日に及ぶという。舞に付随するもろもろの儀式の中には、時の流れに伴い省略されたものもあるが、鷺舞そのものは正しく受け継がれ、日本に残る唯一のものだと聞く。唯一のものというからには、それだけの理由があるにちがいない。事実、この舞を拝観しながら、舞そのものからその理由のようなものをおぼろに感じ取ったが、それはまた、後に西周・^{あまね}森鷗外・福羽美静ら、幾多の逸材を出した津和野藩の気風とも無関係ではあるまい。

舞方は、雌雄の鷺に扮する二人のほか、棒振・^{かつこ}羯鼓各二人である。背後から舞方を取り巻くように囃方の太鼓・^{かね}鉦・鼓・笛各二人が半月状に並び、さらにその後ろに、唄方数人が控えている。ほかに当屋^{とや}二人、警固十二人がいて、神事の世話や観衆の整理などに当る。現在の鷺舞の構成は、およそ以上の通りである。

毎年祇園祭の始まる七月二十日の夕刻近くなると、御神体は御旅所へ渡御になる。鷺舞の一行は、その年の神事のいっさいを執り行う当屋から神輿を迎えにゆき、渡御直前、神前において舞の奉仕をする。町内十一か所の四辻を舞い歩いた舞衆は、神輿よりおくれ御旅所へ到着し、神前で舞い終えると、当屋へもどり、七日後の還御の日を待つのである。

鷺

舞

隣県に長く住みながら、この由緒ある神事を拝観する機会を作りえなかったのは、少々迂闊だ

ったような気がする。ともあれ、今年は、津和野町立郷土館の森澄泰文氏の御好意にすがって、還御の日に当る二十七日の早朝、鷺舞拝観のため広島を立った。引きつづき日本海岸の人麿や雪舟の遺蹟を探る予定も加え、若い友だち十名ほどの同行を得て、にぎやかな小旅行となった。

当屋は限られた家が交替で受け持つならわしだったが、今では簡略化されて、殿町の旧藩校養老館跡にある公民館が、それに代るようになっていた。午後三時半、鷺舞が公民館前で始まるという電話が、森澄氏からあったので、一行は宿を出てそこへ急いだ。囃子の音に吸い寄せられるように、町のあちこちから観衆が集まりつつあった。舞はすでに始まっていたのである。

雌雄の鷺は、白布の単衣にひぢりめんの裁着袴をはき、木製の白鷺の頭をかむり、同じく白色の木片で作った羽の形を身につけている。嘴は黒く、それを雌は閉じ、雌は開き、そのまま阿吽の呼吸にかなっている。後ろにつき出た羽冠は、さがが二本に裂けた作りである。おおむね白と赤の単調な色の対照。畳むと一番内側になる、左右それぞれ一片の羽の根にくくりつけられた手によって、翼は自由に開閉される。唄がつぎの曲節へ高まるとき、カタカタという音を立てて羽ばたくしぐさが、この優雅な舞に、凜とした節奏を与える。鷺が翼をひろげたとき、午後の日ざしが、笏を細長くした形の羽の一片一片を、くつきりと舗道に焼きつけた。

鷺舞の一行は、御旅所へ向かう道中、四辻ごとにとまって、舞を奉仕した。やがてかれらは、神輿の還御に従って、弥栄神社にもどり、御神体が本殿に入御されるとき、社前でもう一度舞つ

た。大任をつつがなく果した安堵感のようなものが、唄からも囃子からも舞からも感じられた。境内には、樹齡五百年の大樗を中に松の老木が立ち並んでいる。油蟬の斉唱にまじって、木立の奥から日ぐらしの声もきこえてくる。斜の縞模様をつくった木洩れ日の一条が、高々ともたげた雌鷺の白い項うなじに当たったとき、「……しぐれの雨に ぬれとーり とーり」の唄声が、ひときわ高くなった。

雌雄一番だけの舞であることが、この鷺舞の性格を決定しているように思った。二羽がたがいに寄り添い、向き合う、おのずからなしぐさから、えも言わぬ愛恋のあわれが感じられた。そういえば、雌鷺のほのかに開かれた嘴もあどけなく、あわれを一入深くした。「しぐれの雨に ぬれとーり とーり」には、平安京の風土と文化の中で発達した修辭の極致が伝えられている。「ぬれとーり」は、上にすぐつづけると、「しぐれの雨に濡れ通り」となり、切り離すと「濡れ鳥」という名詞ともなる。いわゆる掛詞の手法である。そのうえ、「ぬれ」には、男女の交情のこまやかさも匂い出ているようである。白い羽でそっと包んだ緋の裁着袴は、燃え上がろうとする愛恋の焰を象徴するが、カタカタと羽を鳴らして、つぎの動作にうつる、やや意志的なしぐさは、やがてお互いの身を焼き亡ぼすかも知れぬ恋情を鎮めるわざとも見えた。一瞬、高々ともたげた二つの白い頭こぶえを、「悲しみ」がさっとかすめたようである。

(四七・一〇)